



古道が紡ぐ物語



神武天皇東征の道①（紀伊・熊野から吉野へ）

「古事記・日本書紀」において、神話から人の歴史に移行するのが神武天皇の東征説話である。神話・伝説の域は超えないが、考古学や地域の伝承と共に読み解くことに興味は尽きない。

ヤマト入りを目指す佐野命（神武天皇）一行は、生駒山麓において長髓彦の抵抗にあい紀伊半島を迂回せざるを得なくなったが、その行程は難航を極めた。しかし、後世には熊野信仰の高まりから、熊野三山へ西国からの紀州路、伊勢神宮からの伊勢路、田辺からの中辺路、白浜からの大辺路、高野山から小辺路、吉野から大峰山脈経由の大峯奥駈道が整備され、今でも、その所々で神武天皇の足取りを示す伝承が残り、神話・伝説の世界を垣間見ることができる。

神武東征以前のヤマト・紀伊半島

南九州を出発した佐野命（神武天皇）は、筑紫、安芸、吉備と瀬戸内に沿って準備を整えながら、当時は入江が広がっていた現在の大阪平野に入り、河内国草香邑白肩津（東大阪市善根寺町）に到着。生駒山を越えてヤマト入りを図ったが、土地の土豪である長髓彦は孔舎衛坂（東大阪市日下町）で迎え撃ち激戦となり、神武軍は兄の五瀬命が肘に流れ矢が当たり負傷し退却を余儀なくされた。

神武天皇一行は「日の神の子孫の自分が日に向かって戦うことは天の意思に逆らうこと」と悟り、紀伊半島を迂回すべく、大阪湾に沿い南下した。

男之水門、現在の水門吹上神社（和歌山市小野町）、あるいは男神社（大阪府泉南市）ともされるが、ここに至り、五瀬命が悔しさのあまり雄たけびをして崩御され、竈山の地、現在の竈山神社（和歌山市和田）に葬られたとされる。

ヤマト・紀伊半島の状況

その頃のヤマトであるが、神武天皇即位以前から、すでに政治勢力が定着していたと考えられる。

三輪山（奈良県桜井市）の北西麓一帯に広がる弥生時代末期から古墳時代前期にかけての大集落遺跡の纏向遺跡は、主に3世紀に建設されたとみられ、邪馬台国に比定する意見もある。

「記・紀」では神武天皇の前にすでに饒速日命が天下っていたとされるが、史実でも、その子孫とされる物部氏や、海人系の和邇氏といった古

くからの氏族も定着していた。

出土物をもても、出雲、吉備等の広域的な文化が到来しており、神武東征の過程でも、多くの氏族の祖とされる神々に出会い、助けられている。

南九州の神武天皇の勢力が、武力により、あるいは宗教的呪術をもとに平らげていったというよりも、九州方面に遠征していた、ヤマトの指導的有力部族の一族が、敵対するライバルに苦心しながらも故地に帰ったとする見方もある。

高天原から先に天下り君臨していたとされる饒速日命が、長髓彦の妹を娶いながらも、後に、神武天皇にその座を譲っており、さらに、高倉下命がヤマトを目指す神武軍を熊野において助け重要な働きをしているが、高倉下命は尾張氏の始祖・天香具山命と同一とされ、「先代旧事本紀」では饒速日命の子としている。

紀伊半島での足跡

紀の国に入った一行は、「日本書紀」では名草邑で名草戸畔という女首長の率いる勢力と相対しこれを滅ぼしたという。かつての紀ノ川河口部で、現在の紀三井寺周辺である。戸畔とはヤマト王権以前の巫女的な性格を持った部族の長である。

紀の国からヤマトへは、紀ノ川をさかのぼるのが最も合理的ではある。しかし、強力な敵対勢力があり、やむなく紀伊半島沿いに海路を進むこととなったが、地元では、有田、田辺、白浜、周参見、串本と南下し、那智勝浦、新宮に至る地に多



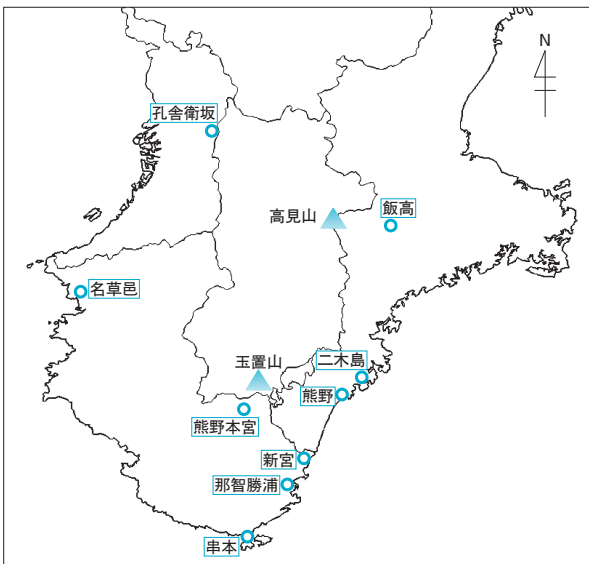
五瀬命を祀る竈山神社



二木島湾（上）と楯ヶ崎
（左、写真：熊野市観光協会HP）



紀伊半島地図



くの伝承が今も残されている。

「日本書紀」では、熊野の神邑（新宮市）に上陸し天磐盾に登ったと記している。これは、熊野三山の一つ「熊野速玉大社」の撰社神倉神社のゴトビキ岩に比定される。

神武軍は、更に東に進むのであるが、熊野の「荒坂の津」あたりで暴風により船団は難破し、神武天皇の兄である稲飯命と三毛入野命は溺れ死んでしまう。この荒坂の津についてはいくつか比定地があるが、地元での伝承の多さからして現在の熊野市の二木島湾とみられる。

一行の舟は、楯ヶ崎に打ち上げられたとされるが、ここは高さ約 80m、周囲約 550mの柱状節理の大岩で、周囲は柱状節理の断崖が続き、天然記念物に指定されている。

この時、二木島の人々が救助に駆けつけ佐野命（神武天皇）は助かったが、亡くなった稲飯命と三毛入野命は、湾を挟んで、それぞれ室古神社、阿古師神社に祀られている。兄を全て失い、これ以後、神武天皇は九州で生まれた息子である当志美美命と指揮をとることとなる。

荒坂の津に到着した後は、丹敷戸畔の率いる賊軍と遭遇しこれを誅しているが、その際、「古事記」では、神武軍は熊野村の大熊の毒気にあたって気を失ったとしており、「日本書紀」は神が毒気を吐いて神武軍は病み伏したとする。

ここで、熊野を治めていたとされる高倉下命が表れ、夢の中での武甕雷命のお告げにより布都御魂の剣をたてまつったことで神武軍は再び目覚めたとする。この剣は、素戔男尊が八岐大蛇を切った鉄の神剣で、現在、石上神宮（天理市）において祀られている。この高倉下命は尾張氏の始祖とされ、伊勢湾岸に勢力を持つとみられる。

八咫鳥（やたがらす）に導かれ山岳越えへ

神武天皇一行は、遭難により船を失ったことで、熊野の山岳地帯越えという困難な進路を採らざるを得なくなったが、この折に、一行を導いたのが熊野の神の使いとされる八咫鳥で、その後、新宮から川船で本宮にたどり着き、折立（奈良県十津川村）から熊野三山の奥の院玉置山に登り、山中をヤマトに向かったとされる。

ここから、熊野山中を抜けるコースは日本書紀と古事記とではやや異なる。

また、江戸期の国学者本居宣長は、二木島を出た後、さらに紀伊半島を北上し、飯高町（三重県松阪市）から櫛田川沿いに高見山（奈良県東吉野村）を越えて吉野に出たとしており、熊野から伊勢にかけての村々にも伝承が残っている。（続く）

（山城 満）